

連載・イタリア「第二のルネッサンス」の現場訪問記③

# 住民による自治・文化・子育て

——ボローニャ市の経験から

●ノンフィクション作家

今崎 暁巳

## 熱い秋論争にみる 第二のルネッサンスの萌芽

日本の高度経済成長社会のウィークポイントであり、二一世紀への生活変革の基本課題が、時間を豊かに使う暮らしづくりである事実に気づくなかで、あらためて、第二のルネッサンスと、地球規模、現代史転換規模のタイトルを自他ともにつけるイタリアの現実を直視すると、まず、時間の豊かさへの追求努力は、第一のルネッサンスを前哨戦として、とりわけ、一九世紀半ばの労働運動、資本主義社会変革運動の誕生以来一四〇年ほど、多数派市民の合意事項として、営々として政府・経営者に改善を要求しつづけ、現状の成果をかちとってきているこ

とが見えてくる。夜は残業せず、単身赴任もしないことは、キリスト教徒も社会主義者も合意する社会生活習慣になっている事実の重み。

これは実は、労働運動もふくめ、市民の自治が社会生活の日常を育てるほどに、少なくともイタリア中部では発達していることを意味している。特にこの二〇年ほど、一九六八年の、熱い秋論争を出発点に、各州自治の財政的裏づけとなる七五年の税制改革を物的条件として生かし、住民の自治による生活づくり、文化づくりが、世界の住民自治にかつてなかった状況をつくりだしつつあるということ。

この自治優先の税制改革を結実させた七年間にわたる労働団体、市民団体、政党総ぐるみの、熱い秋論争こそ、第二のルネッサンス運動の出

のです」  
ボローニャ市サベンナ地区の女性文化担当職員であるパロッタさん（三七歳）が言えば、同じ地区の選挙で選ばれた地区住民評議員（教育担当）である主婦ルシアさん（四〇歳）がつけ加える。  
「ええ、私たち母親と市の担当者が一緒に、地域の文化、子育てを考え創りだすことが始まりました。戦後生まれた地区の文化センターが、本当に住民一人ひとりのものになる道が見えてきたのです」

発点であったことにふれておく必要がある。一言でいえば、高度経済成長のひずみのなかで、従来の民主主義運動が壁につきあたり（日本でも同じ壁が問題になっていたが……）、もう一度労働者、市民が日々どう闘うかを七年間模索しつづけ、そこから、自治、同時に、文化、づくりに重点をおく新しい労働者市民連帯運動が始まったということなのである。

### ◇「自治」「文化」が変革の プログラムに

「六八年、六九年は女性の立場、住民の立場でも大変な討論と行動が生まれ、新しい運動が始まりました。子どもを母親だけで育てられなくなった悩みのなかから、女性が出産、育児、教育、文化、医療などを地域

社会で解決していく運動が生まれた

六八年、熱い秋論争をボローニャ大学教育学部で経験し、市職員になったパロッタさんと、若い母親であったルシアさんが今、サベンナ地区に母と子が育ちあう楽園を創る協同行動を展開している姿のなかに、自治、そして、文化、が変革の日常プログラムになっている状況がうかがえる。第二のルネッサンス運動の現場が、住宅・医療・文化・高齢化対策・子育てを軸に、地域・家庭生活そのものの変革に進みつつある一端もうかがえるはず。

「ボローニャでは、地区住民評議員の仕事として、すでに六〇年代に、働く親たちの子ども、貧しい家庭の子どもたちを、地区のお金を使って

夏休みを海や山で過ごさせることを始めました。同時に、働く親の子どもたちの食事問題をとりあげ、後に給食内容の改善に発展する、害のない食事づくりのこともとりあげたのです」

ルシアさんが、地区で子どもの自由時間の使い方や食生活の質など、文化生活の日常に手をつけはじめた様子を語ると、パロッタさんは、国の教育とともに地域の教育として知られる。午後の学校が、市職員の地域における人づくり運動の一步として、やはり六〇年代に始まったことを話す。美術・音楽・体育など学校教育で不足がちな部分を補い、あわせて地域の暮らし・歴史を身につける地域社会の人づくりの必要を情熱をもって語る。

「一九七四年に、国の法律が生まれ、全員午後の教育をうける権利が確立し、教師も、市職員から教員へとひきつがれました。今では、ミラノ、ジェノバ、トリノ、フィレンツェと各地で、豊かな実績をつくっています」

#### ◇—文化は政治の義務である

人づくりそのものと同時に、行政

が深く文化を育て始めたエミリアローマーニャ州全体の到達点を紹介しておこう。

キリスト教民主党政支持者ですと言っている、州の文化担当責任者であり学者であるセルビーニさんは、胸をはって語った。

「文化は州政治の住民に対する義務になりました。例えば、音楽専門の劇場がイタリアに二四ありますが、そのうち六つがエミリアローマーニャ州にあります。イタリアの人口は六〇〇〇万、わが州は四〇〇万ですから、充実度がおわかりだと思えますが、オペラなど国立劇場と州市の劇場を合わせて、エミリアローマーニャには八三の劇場があります。そして、六九年からの一三年間に、市民の劇場、映画館、オペラハウスに足を運ぶ数は、約一〇倍に増加しました」

大阪で子育て中の生協組合員Kさんが、市民の劇場利用回数を聞くと、数字で返ってきた。

「現場工場労働者は、家族全員が月一回ですし、ホワイトカラーは月四〜五回、つまり週一度以上、家族全員が劇場に足を運びます。そのかわり、工場労働者はスポーツ・映画・軽演劇の回数がずっと多いのです」

文化は政治の義務であるという認識

識は、政党支持による差はありません、とセルビーニさんの表現を確認して、イタリア共産党政支持者というオーケストラ二つ、オペラ団一つを州財政で市民のために維持し、イタリア文化を世界に広める芸術組織にもなっているアーテルの事務局長マーニ・アレックスサンドロさんも言った。

「劇場文化は二〇年ほど前まで、ブルジョアジーのもので、オペラもバレエもごく一部の観客でした。今、そこを変えるために、労働組合、協同組合、そして学校と連帯し、誰でもステージであれ、スポーツであれ、選択できる状況をつくっています。アメリカ型自由の文化が、儲けと誇大宣伝で人をひきつけようとするなかで、困難もありますが二〇年の努力で、確実に私たちの文化をつくる成果が、地域ごとに形をなしてきています」

### 新しい住民による文化運動とは

#### ◇—文化の基準はホンモノを提供すること

この、熱い秋、論争から始まった

新しい暮らしづくり運動のなかで、どんなふう新しい住民とともにつくる文化運動が生まれ、劇団が育ったかを、ポローニャ市の文化協同組合・劇団ノーバ・シエーナの劇団員の言葉で紹介しよう。

「ノーバ・シエーナの活動も、ポローニャ大学の演劇グループとして始まり、六八年ごろから地域社会に出て、シエークスピアの芝居を新しい解釈で上演することなどをつづけてきました。一五万都市のバルマ（『バルムの僧院』のモデル）でも、バルマ大学からテアトル・ドウエが生まれ、レジョエミリーヤ、カルピなど、各地で劇場利用、演劇普及の運動がいつせいに起こってきたのです。新たな映画づくり、誰もがやれるスポーツ普及など、とにかく一人ひとりの市民が創り育てる点が共通して、生活が動き出したのです」

ポローニャ市中央部に近い、この劇団ノーバ・シエーナは、現在、中世以来のサンレオナルド教会の内部を改造した建物を本拠にして、エミリーヤローマーニャ州はもちろん、イタリア各地、そしてヨーロッパ、アメリカと足をのばす国際的劇団として活動している。

私たちが訪ねた時ちょうど、間も

なく開演する『リア王』の舞台稽古のなかで、そのステージの作り方や、リア王のスター、レオさんの役作りの様子などを見せてもらい、この劇団がわずか一七、八年で、地域と世界をつなぐ魅力あふれる質を創りだしてきた一端を知ることができたように思う。

「みて下さいよ、このステージの作り方」

猿之助歌舞伎をイタリアにつなぎ、自らも歌舞伎研究家でもある軍司泰則さんが指さす客席をみて、私は思わず息をのんだ。

「え!? 四〇〇席の客席を半分つぶして、前半分を巨木の横たわる荒野にしまっ……」

よく見ると、舞台と客席との段差面に鏡がベッタリ貼りつけてあり、客席からみると遙か彼方まで荒野が広がっているようで、無限の視覚的空間が創り出されている。巨木のそばにたたずみ、空を見上げるリア王の背後に広がるはてしない灰色の空間と無限の荒野の世界……。そこには権力者の力と、孤独と虚無を象徴する芸術的創造が、みことな形象となつて結実していた。

「日本のプロ劇団では、財政的理由で四〇〇席を二〇〇席に削り、二

〇〇人だけでこの芸術的創造空間にひたろうという発想が出てこないでしょうねえ……。芸術的創造にも、まず効率と生産性がこびりつく」

私は、アーテルのアレッサンドロさんの言っていた、アメリカ型誇大宣伝とテレビの影響、スター中心で大きく儲けるショービジネスへの批判の言葉を思い出す。そして、イタリア中北部諸都市では、自治体、行政が、よりよい質の文化を体験する機会を住民に提供する合意が形をなし始めて、とにかく、文化は儲け・効率の対象でなく、いいもの・ホンモノを提供するのが基準になっている。現実を眼の前に見ているのである。

◇——行政・プロが協力した文化づくり

「この前はカンツォーネのミルバ公演。『リア王』が終わったら、猿之助の公演が予定されています。料金はゲーデスの『カルメン』で、普通二七〇〇円、会員は年七回ほどの公演で一万一〇〇〇円ほど会費を払い、『カルメン』には九〇〇円から六〇〇円を払えばいいのです。会員のなかでも、学生やアルチ会員、労働者の場合、年会費九〇〇〇円で毎回も割引があります」

私は観劇料金の安さになつた。どの公演も、東京では一万円をこえる一級品ばかり。その仕組みについて、劇団担当者は語る。

「劇団員は四五人。一人一〇〇万円ずつ出資する文化協同組合。創立以来、地域でよい演劇活動を続けたことを評価され、八一年にこの教会を無償で市から提供され、今では年間市からの補助三〇〇〇万円。国が各地一一劇団の活動への補助が一億二〇〇〇万円。それに八〇〇人の会費、そして入場料を合わせて、四五人の劇団員が全員演劇活動で生活できています」

このノーバ・シエーナ以外に、やはり市から同じ額の補助をもらうドゥーセ劇場があり、さらに公演補助の形で市とつながる人形劇団など、文化協同組合の組織は四八万都市、ポローニャだけで四〇あり、演劇だけで七つあるとのこと。

つまり、ポローニャ市だけで、市からの運営補助三〇〇〇万円をもらう劇団が二つ、公演補助をもらう文化団体が四〇もあるという大変な事実。一五万都市バルマにも、市と深くかかわる劇団が国際的劇団として存在し、五万都市カルピにも、一三万都市レジョエミーニャにも、一九

世紀初め、ナポレオン時代にできた一八〇〇席の華麗なオペラ劇場が存在し、庶民が好きな人は週一回、サッカー派の庶民でも月一回は家族全員通えるようになってこの仕組み。大切なことは、行政、プロが協力し、この二〇年ほどの間に、誰もがいける日常的ネットワークをつくり、料金をサッカー見物より安くすることに成功した点である。

◇——真の住民のための文化とは

くり返すが、イタリアもこの二〇年ほどの間に、中北部の先進的諸州における保守革新をこえた。自治への努力のなかで、財政を変え、諸団体の合意・連帯を育てつつこまできた点が重要なのだ。キリスト教民主党のエミリアローマーニャ州文化担当官がおっしゃるように、二〇年前までは、イタリアでもオペラ、バレエ、オーケストラは、決して庶民のものではなかったのである。

自治体行政が、真に住民のための文化の価値に目覚めた時の大きな効果を、パロッタさんたちのサベンナ地区に新しく生まれた文化センターのすばらしい成果に見てみよう。

「そうです。この文化センターの

四〇〇〇平方メートルの建物も、池あり林ありの緑の空間も、もとは王制廃止以前の貴族の館だったのです」

私は案内され、館の中心にあるバルコニーから市街地を見渡し、一瞬、自らが貴族の視線で庶民の暮らしを眺める錯覚に陥った。一階の一〇〇人ほどのハイソサエティーが楽しむための小劇場といい、広々と豊かな大広間といい、空間と調度のかもしだす雰囲気といい、確かに建物と空間と緑の創りだす小世界そのものが、私たち二〇世紀末の異国の庶民たちを古きイタリア貴族のゆとりの世界にひたらせる絶大な魔力をもっている。案内する男性評議員は言う。

「その古い時代のゆとり、楽しさをそのまま生かして、この地区の今の老人も若者も幼児たちも、誰もが出会い、生活する場所に再生させるのが、私たちの希望です。市もそのねらいを支持して、決して観賞用保存用の文化財にはしなかったのです」

文化財保護でなく、生活財として貴族の館を現代の住民の生き、楽しむ場所に創りかえる——私は言葉どおり、貴族の館の文化的機能を生かしつつ、現代住民の文化センターとして改修した成果に目を見はった。マロニエ、ヒマラヤ杉の並木、と

ちの実にまつわりつくリス。その下の小道をたどり、腕を組んで歩くマストロヤンニ、ソフィア・ローレンを連想させる白髪の男女。その道の彼方に広がる平屋の保育園からきこえる子どもたちの歌声。左手の小高い場所に立つ独立家屋には、ロックからクラシックまで、あらゆる音楽的試みのできるスタジオ、そして楽器がおかれ、若者たちが集まってくる。中央の館には、小・中学生の読書活動のための部屋。高齢者やリハビリ患者たちが医療専門家に相談し、日常プログラムをつくるデイ・ホスピタル（多目的診療所）の部屋。さらに、一〇〇人ほどで観賞するための前述の小劇場空間。二階のバルコニーに連なるサロンでは、地区評議員全員が集まって、評議員会を開催することができ。もちろん、スポーツ、狩猟のメンバーが語りあい、企画をたてるサロンもちゃんと存在する。

「つまり、不特定市民のための公園でもなく、まして日本の明治村のように古い建物を集めて見世物にするのでもない。現代の地域住民が、地域社会を豊かに楽しく生きる場所、生活財として生かすということ……。しかも、われわれ異邦人観光客が訪

れても、ずっとこの方が楽しい。なぜなら、建物・庭園を観賞する楽しみとともに、ポローニャの人に出会えるから……。これからの観光は、人と出会えることがポイントでしょう……」

日本の協同組合代表のおしゃべりが通じたわけでもないと思うが、館の入口に立っていた中年女性が、にこやかに微笑んで挨拶してくれた。

「ここは私たちサベンナの住民の自慢のセンターです。はるばる日本からきて下さった皆さんを心から歓迎します。」

## ポローニャにみる 二一世紀の都市づくり

◇——中心にするのは都市の自治

私は今、主としてエミリヤローマーニャ州の州都ポローニャにしぼって、イタリア中北部に進行中の住民自治による人づくり、町づくり、文化づくりの現状を伝えている。おことわりしておくが、ポローニャ市はたしかに、大阪市大宮本憲一教授が、二一世紀の都市の先どり・と紹介されるほど、自治と文化あふれる代表的

町ではあるが、決して、すべてでも、最高でもないということである。イタリアを語る時、必ずイタリア人でなくローマ人であり、ベネチア人であり、フィレンツェ人であり、ポローニャ人であるといわれるように、とりわけ現在、中北部諸都市、すべてのコムネ（自治体）が自らの自慢の町づくりを進める。第二のルネッサンス運動の怒涛の現実を見なければならぬ。ミラノ、ジェノバ、ベネチア、さらに南部のナポリ、パレルモも、それぞれに個性を競うとともに、エミリヤローマーニャ州内でも、一三万都市レジョエミリアや五万都市カルビの方が、市民の平均的文化生活度はポローニャ市より高いという現実があるのだ。

ヨーロッパのいい所をとり入れて成長してきた日本人として、今、この古代からの自治・町づくりを大切に、絢爛自由な。おらが町づくりを展開する。第二のルネッサンス・状況を真剣に分析する必要があるのではないか。東京も個性のある一つの都市、名古屋も京都も大阪も広島も沖繩も大雪山系の一つの村も、みんな私の自慢の村といえるような町づくりこそ、日本人も求めているはず。われらの歴史をひもとけば、島

原の乱もあれば隠岐コンミュニオンもあり、堺自由都市、函館五稜郭、秩父自由民権運動の史実が存在しているのだ。まして今、南北東西を問わず、世界に努済のごとき、自治と自由への風がまき起こっている時代である。

宮本教授のいわれる。ポローニャが二一世紀の都市の先どりをしていく条件についていえば、まず都市の自治そのものを中心にする事、そして中小零細産業、農業、協同組合などの大多数市民の技術・人間関係をなによりも大切にす町づくり・文化づくりであること。つまり、大企業が効率と利潤一辺倒の文化や町をつくることを、住民がチェックすることのできる町なのだ。ポローニャの道路は中世以来の幅員材質そのまま、ラッシュ時に車は中心部に進入できない。今、観光ブームで、他県車の進入に悲鳴をあげている京都市の住民対策、道路行政はもって銘すべきではないか。

◆市民の観点からみた町づくりの古さ・新しさ

三つ目に、人間の暮らしづくりについての新しさ・古さについてふれておく必要がある。日本では、生活

様式の面でヨーロッパの諸都市が古くなり、便利効率が悪いような認識がまだまかり通っているところがあるので、経営者の立場でなく市民の観点で、町づくりの新しさ・古さを見ておこう。

この点で、まず言うておく必要のあることは、イタリアは政治、経済、文化あらゆる面で、新しいものを作り入れるのは日本よりはるかに早く、近代の創造者レオナルド・ダ・ビンチに象徴されるように、むしろ常に新しい世界を創りだす天才、ただし権力に縁のない自由人の国に近づきつつあるといえるのではないか。その点で、まず磯村尚徳氏の言葉を聞いてみよう。

「世の中が重厚長大な産業から軽薄短小の時代に移るとともに、また、お隣りの西ドイツがいわば日本と同様、物を創る製造業で発展してきたのに対して、それがゆきづまり、むしろ物を作るよりも、知恵をしぼることに先進国の関心が変わってきて以来、イタリアのもっているすぐれた創造力や、堺屋太一さんの表現を借りれば、知価創造の時代を迎えて、イタリアのよさが徐々に発揮されてきている。このことは、ファッションやさまざまな工業デザイン、建築、

さらにはコンピュータ・ソフト、ベンチャービジネスなどの面で、イタリア人のなものにも束縛されない自由な発想や創造力が生きているものだ。このことから、第二の奇跡と呼ぶ人もいるくらいで、今やイタリアの時代が近づきつつあるのかも知れない。」(『ウィークス』八七年二月号)

この新しさを大胆に小企業や協同組合の商品づくりに取り入れ、大企業にできない技術創造をしながら、一方で町の道路公園、中世以来の地元産赤煉瓦の非高層建築を、言葉の完全な意味で、全くそのまま、補修し、使いつづけている四八万住民の町ポローニャ——つまり、昔からの市街地には不動産屋は入れず、建物の修復は市の生活財保護の予算もつき、伝統的技術で行なわれる。世界最古の大学、ポローニャ大学の学生たちは、今年九〇〇年祭を迎え、一世紀以来の、雨が降っても傘のいない回廊式街並みを、ゆっくり散歩することができるとのことだ。

大学のはずれの丘の上から見わたすと、現代の高層建築ははるか郊外にしか見あたらず、市街地は人肌ぬくもりを感じさせる独特の赤煉瓦の建物がどこまでもつづき、ところ

どころに、中世の支配者たちが侵入者を発見するために作った物見の塔が立っているだけである。

◆ポローニャ行政の政策について

こうしてポローニャ市では、各地区の住民評議会と市職員が協力協同して、子どもたちの子育て、若者たちの高齢者への援助を市財政で組織するところまでできていること。そして、行政が劇団を育て、協力して住民の芸術・スポーツに安く日常的にふれる機会を、文化づくりは行政の義務・というほどに急速に増やしていること。さらに、人民の家・アルチなどの自主的住民運動とも互いに乗り入れ、行政と住民が手を結ぶ網の目のような住民ネットワークがしだいにきめ細かく豊かになっていく姿を、いくつか紹介することができた。

その状況を可能にしたポローニャ行政の考え方、政策を紹介しておこう。

●住民自治で経済危機を克服

まず、ポローニャ大学経済学教授である市の商工担当官(局長、議員でもある)が、「ポローニャだけで

なく、エミリヤローマーニャ全体として、中小企業、協同組合が中心となつて、七三年以後の経済危機を柔軟性をもって乗りこえることができた地域です」と明快に前置きしたうえで、大企業が国家財政を使つて一時帰休などの雇用対策をとつても労働者をつぶしてしまう現実を批判し、

「ローニャでは、行政、協同組合、中小企業が力を合わせ、協同の仕事おこし、技術開発、低利優先の青年たちのハイテク修得、就職援助などを進め、失業率が低いことを語つた。さらに、農業県であるローニャの産業、畜産・酪農・皮革・ファッショ、煉瓦、タイルなどが、ハイテク応用、協同組合化の流れのなかで、いっそう世界市場に通用する技術力、商品力をつけることをいい、その地域の経済力・文化力をつける基礎を地区住民評議会におくことをつけ加えたうえで、次のように言つた。」「市行政は、今後、各地区ごとの自治力がつくなかで、コーディネーターの役割を果たすことになり。まず一六地区を九地区に統合し、ご覧になつたサベンナ地区の文化センターをみてお気づきのよう、住民自治がいつそう身近なものになりつつあるのです。」

### ●三つの政策協定

つぎに、一五世紀以来の格調高い市庁舎応接間でお会いできた、三八歳の女性文化担当官ソステルさんが、ローニャにおけるあらゆる市民、政党団体が合意している三つの政策協定について語つて下さつた。ローニャの町づくり政策協定として。

「一つ目は、一二世紀以来の大学の町であるローニャの特徴を、なによりも大切に自治の大切さ。二つ目は、政治・経済の流れより、文化の移り変わりの流れの方が速く影響が大きいから、文化対策を大切にする。三つ目には、子どもたち、若者たちが健やかに育つ町づくりを大切にしたい」

自治、文化、子育て、この三つがローニャ市の共産党、キリスト教民主党、社会党、共和党など、ファシスト党を除く全政党が合意している町づくりの基本理念であるということ。自治をとことん強め、住民による町づくり・文化づくりを進める条件整備とし、コーディネーターに徹しようとしている政治の民主化の姿——イタリア「第二のルネッサンス」の具体性が、もう一つ明らかになつてきた。

### ●観光都市と同時に文化・福祉都市

ローニャ市は、この町の遺跡、中世そのままの町並み、きめ細かい住民自治、豊かな文化芸術、そして美しい自然を生かした国際観光都市と呼んでいい。ここ二、三年だけでも、世界都市学会、そして世界の絵本祭りが開催され、昨年は大衆的な文化の祭り、イタリア共産党ウニタ祭が開かれ、一日で一〇〇万人の市民を集めたし、今年はまだ、年間を通してローニャ大学九〇〇年祭が開催される。おそらく、西ヨーロッパに限らず、洋の東西を問わず、大学のルーツと新たな知性の輝きを求めて、大勢の外国人がダビンチ、ミケランジェロを生んだ解剖学者の部屋を訪ねるに違いない。

この町の観光行政が、やはりたんに外国人集めと経済活性化の目的だけでなく、同時にローニャ市民の文化、福祉対策の目的を生かしている実例として、サマーフェスティバル企画の話を書いてみよう。

「車で三〇分、静かで美しい八月のアドリア海で心ゆくまで泳いで、太陽が沈むころ、中世の石畳の街に帰りつき、ローニャ独得の肉料理にワインで乾杯。そして、やがて月が昇るころ、市庁舎前の広場に巨大

なスクリーンをはりめぐらし、映画をみよう、ロックバンド、カンツォーネ、なんでもお好みに応じて。また、別の広場・城壁を背景に、人形劇でも、『ロメオとジュリエット』の新作ミュージカルでも……夜といわず昼といわず、八月の一週間、ローニャの町はバカンスに行けない学生、老人たち誰もが、お金を払わないで楽しむたといイベントとふれあいの時となるのです。外国人も市民も大人も子どもも誰もが、解放されパフォーマンスする素直な人生の時となるのです」